提言

暴力がなかった時代の運動文化を取り戻せ

「常歩（なみあし）」に関する著作活動などで知られる九州共立大学の木寺英史准教授は、スポーツ学科の授業の中で「暴力的指導」について取り上げている。学生が書いたレポートによれば、強豪チームの選手は体罰を肯定し、暴力をふるった指導者に感謝さえしていることが明らかになった。自らが中学教師だった20数年前は学校で体罰が常態化し、武道・スポーツ教師はそれを行使する先頭に立たされていた。そんな現状とこれまでの流れを冷静に踏まえた上で、体罰も勝利至上主義もなかった日本の伝統的運動文化に立ち返ることで、暴力的指導をなくす道を木寺氏は提唱する。（聞き手・鈴木智也）

叩かれて成長したと感謝している選手たち

――毎日新聞福岡版で、九州共立大学における木寺先生の授業が紹介されています（1月31日付）。体罰に関する問題を授業の中で取り上げていますね。

スポーツ指導論という1年生の授業を行なっていて、300人ぐらいの1年生を4クラスに分け、私は2クラス、150人を担任しているのですが、その授業で暴力的指導についてのレポートを書かせました。スポーツライターの金子達仁さんによる、暴力的指導（体罰）は絶対良くないという文章を読ませたあとでレポートを書かせたので、暴力的指導には反対という学生がもっと多いと思っていたのですが、結果は「体罰（暴力）的指導」が「必要である」と答えた者が41％、「必要がない」が54％、「どちらともいえない」が5％でした。

これらの答えを「実技方式」で入学した者と「学力方式」で入学した学生とに分けてみました。「実技方式」で入学してきた学生76名のうち、「必要である」とした者が51％と半数を超え、「必要がない」とした者が46％でした。一方、「学力方式」で入学してきた学生では「必要である」は31％と少なく、「必要がない」は61％。両者は明らかに違っていました。

つまり強い学校でスポーツを経験してきた子たちは暴力的指導を肯定しているんです。完全に肯定ではなくても、強いチームをつくるとか、強い選手を育てるためにはそういうものも必要だと彼らは思っているわけです。

――自分は殴られて育てられたからこそ、今の自分があると思っている。

そうです。だから殴ってくれた先生に感謝しているんですね。授業の中で「暴力的指導を受けた経験のない人」に挙手をさせたら、手を挙げたのは80人のうちたった一人だけでした。遠慮して挙げなかった子もいるかもしれませんが。

そうすると、やはり連鎖があると思うのです。自分はそうやって先生に殴られて強くしてもらったので、自分が指導者になったら同じような指導をするという。もちろん私は暴力をなくしていくべきだと思いますが、そのためにはこの連鎖を断たなければなりません。

――そして、暴力を親も肯定している場合もあります。指導者を信頼して「ちょっとぐらい殴ってください」という親もいると聞きます。

それはたくさんいるでしょう。「うちの子が強くなるんだったら厳しくしてもらっていい、殴ってもいいからよろしくお願いします」と言う親はたくさんいると思います。

武道だからこそ、暴力に対してもっと敏感に

――木寺先生は「常歩（なみあし）」の研究などを通じて他のスポーツの人たちとも交流

木寺英史　九州共立大学准教授

きでら えいし

九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科准教授。昭和33年熊本県生まれ、剣道教士七段。筑波大学卒業後、高等専門学校教員を務めながら、剣道の技術の研究をきっかけとして他分野の研究者やスポーツ選手との交流を深めつつ「常歩（なみあし）」理論を構築。平成16年に著した『本当のナンバ常歩』（小社刊）が大反響を呼び、以後剣道界に留まらず、スポーツや身体操作全般にわたって精力的な著作活動、講演、コーチングなどの活動を続けている。主な著書に『剣士なら知っておきたい「からだ」のこと』（大修館書店）、『錯覚のスポーツ身体学』（東京堂出版）、最新刊の『日本刀を超えて』（小社刊）など

―がありますが、他種目ではどうですか。

子どもがソフトテニスをしている保護者の話を聞いたことがあるのですが、試合中に指導者がコートに入って、殴る蹴るの暴行を選手に加えていたそうです。また別の方から、娘さんがバレーボールの練習試合で、自分の監督の先輩である相手チームの監督から暴力を振るわれたという相談を受けたことがあります。

暴力的指導が生まれる一つの原因は、日本では学校中心にスポーツ活動が行なわれているということです。学校対抗の試合になるから何が何でも勝たなければというふうになってくる。ヨーロッパのようなクラブでやっていたら、またちょっと違うでしょう。

けれども、面白い話があって、サッカーでは20歳ぐらいまでの年代はJリーグの下部組織、つまりクラブチームで育ってきた子たちがすごく活躍する。ところがトップに行くと高校の部活動出身の子たちが活躍するそうです。暴力があるかどうかは別としても上下関係とか厳しい指導の中で、鍛えられてくるから精神力が違う。クラブで育った子はすぐあきらめてしまう。

――クラブでは技術を教えるだけで、技術がない子は落ちこぼれていく。高校の指導者のような精神面の指導はされないということでしょうか。

いろいろな分野の指導者に聞くと「理不尽なことをさせないと勝てない」という点で一致しています。皆さん異口同音に言いますね。たとえばグラウンドを100周走れとか、理不尽なことをある程度わざとやらせる。そういうふうにして達成感を味わわせているときのほうが、部員がやめることも少ないそうです。「こんなことやってられるか」というようなことをさせられているときのほうが、人間は連帯感も出て、一生懸命やる。

――寒稽古とか立ち切り稽古などの伝統的な稽古もいわばその類で、それは確かにそうでしょうね。

だからこれは難しい問題ですね。私が勤務する九州共立大学の野球部は日本一になったこともあって、部員が200人ぐらいいるんですが、たまに40キロ走らせたりしている。野球部の監督とも話をしますが、「指導者は教え子を脅さなければいけない。そうしないと限界を超えてこない」と言っています。

――剣道でも、今成績を残している指導者の多くは、そういうことをさせているでしょうね。殴るかどうかは別としても。

鉄は熱いうちに打てといいますが、高校生とか大学ぐらいのときというのは、そういうふうにして引き上げる必要もあるんですね。その方法が暴力的指導になったらまずいけれども、それに変わるような厳しさは絶対必要だと思います。

――一対一での稽古で追い込んだり、かかり稽古といった厳しい稽古の仕方も剣道では昔からあります。

私の在学中、筑波大学ではそういう指導をしていました。先輩が厳しい稽古をつけてくれて、いつも先生方が「もうそこらへんでやめておけ」と止めていました。そういう指導で強くしていただいたわけで、それをしてもらわないと、何となく寂しいという気持ちもありました。そういう面は確かにあるような気がします。

――木寺先生は早稲田大学に1年通った後、筑波大学に入学し直して卒業していますが、大学での上級生からの暴力はありましたか？

早稲田のときも筑波の4年間でも、一度もありません。筑波での稽古はそれは厳しかったけれども、叩かれたことはないです。

――剣道はある程度稽古で直接しごくことができる。

剣道というのはかかり稽古という陰湿な稽古法があるから(笑)。武道でも柔道では絶対できないらしいです。体力的に強くないと投げられない。だから大学でも柔道と剣道の学生を比べてみると、暴力的指導を受けてきたのは柔道の学生のほうが多いです。稽古で投げられないからひっぱたく、ということもあるのかもしれない。

――しかしかかり稽古も相手を痛めつける意図で行なえば暴力に変わりますよね。

まず、防具を外した状態で手を出すことは暴力的指導であり、やってはいけない。そこにラインは引けると思います。防具を着けた状態でも、以前インターネットに大分の中学校で指導者が暴力的な稽古をつける動画がアップされ、問題になりましたが、あれを見るとやはり異常だと感じました。

――逆に、剣道を知らない親から見れば、ちょっと厳しいかかり稽古が暴力的なものに感じられてしまう可能性もありますよね。

あるでしょう。難しいですね。今は携帯で簡単に動画が撮れてしまいますし。

――試合会場で、我々専門誌や新聞記者などから見えるところでも選手を殴っている監督はいます。

見えないところではなく、試合会場で教え子を叩く心境は理解できないですね。一説によると、他のチームの選手を萎縮させるために、自分の教え子を殴るという手段があるらしいです。一つの作戦としてね。よく聞く話です。

――殴られる方も作戦として納得しているなら、何も言えないのかもしれませんが……。結局、他の種目に比べ剣道は暴力的指導が多いのでしょうか、それとも少ないのでしょうか。

それはよく分かりません。ただ、過去に大学剣道部の学生間の暴力で死亡者が出た例もあるわけですから、世間から見てあまりいいイメージはないかもしれません。

どなたかが言っていましたが、武道というのは技自体がもともと相手を殺傷するためのものであるから最も暴力的なものであり、それを健全に文化として継承

するためには暴力的なものを極力排除しなければならないと思います。形という教習体系とか、竹刀や防具によって暴力を非暴力的にすることによって、文化として現在に継承されてきたわけです。だから武道をする人間は、暴力に対してもっと敏感にならなければいけない。私はそういうふうに思っています。

体罰が当たり前だった中学の〝暴力教師〟

――木寺先生は、大学卒業後、中学校教師を務めたあと、高等専門学校の教師を経て現在は大学の教員ですが、中学教師時代、体罰はありましたか？

まず、武道やスポーツの世界でこの問題を扱うとき「体罰」という用語が使われますが、それは1年ほど前に桜宮高校バスケット部での問題が起こってからのような気がします。それもあって、今はスポーツ現場での暴力的指導と学校での体罰が一緒くたに論じられているところがあるように思います。罪を犯した人間に課すのが罰ですから、本来スポーツの現場にはなじまない。これまでスポーツに関して、「あの先生は暴力をふるう」とは言っていたが、「体罰をする」とは言っていなかったと思う。やはりスポーツとか武道の現場には、体罰という言葉を使うこと自体がニュアンス的になじまないと思いますので、私は「暴力的指導」という言葉を使っています。

指導者が選手を限界まで追い込む稽古が上達のために必要なことは、多くの剣士は認めるだろう。だが相手を痛めつけるという意図があれば、「暴力的指導」になる。その線引きも難しい

一方、学校での体罰ということでいえば、学校教育法に「体罰をしてはいけない」と定められているのですが、私が20数年前に8年間中学教師を務めていたころは、事実として体罰が行なわれていました。学校が荒れた時代だったのです。

当時はまだ学校で問題が起きたときに警察を入れることがタブー視され、警察権力は入れないという不文律のようなものがありました。そこで学校内で警察と同じような役割をしていたのが、体育とか武道系の先生を中心とした教師による体罰とか暴力的指導でした。それによって沈静化したというか、学校の秩序を治めていたような面がある。当時現場にいた人間から言わせれば、そういう一番汚い、嫌なところを私たち体育・武道系の教師にやらせておいて、管理職も校長も、教育委員会も文部科学省（当時は文部省）も、それを知りながら黙っていた。体育・武道系の先生方を体罰の行使に利用していたといえます。

正直に言いますと、中学校にいた8年間は、私自身が暴力教師でした。着任早々、校長に呼ばれて「叩いて指導してください」と言われました。異様でしたね、廊下に生徒たちを並んで座らせ、何人かの教師が片っ端から殴っていく、というようなこともありました。学校に対する反抗が表に出てきて、それを先生たちが抑え付けていた時代です。今でもあるかもしれませんが、夜中に学校のガラスが割られることもありました。

ある中学校がすごく荒れているので、その学校に武道の有段者である教師を何人も集めたなどということが、先生たちの間で話題になったこともあります。そのように武道教師が利用されていた一面があることは訴えておきたい。

――今は学校でそんなことをしたら大問題になるので、できないと思いますが、どうして収まったのでしょう。

警察を入れ始めたからです。20数年前からでしょうか。これはもう手に負えないというので何かあったらすぐ警察を呼ぶようになり、学校の中に警察が入るようになった。それが当たり前になって、荒れているというような状況は収まりました。しかし、それで発散しなくなった子どもたちはいじめに走るようになった。私が教師をしていた頃はいじめはほとんど問題になっていませんでした。陰湿な方にいったんですね。

――しかし連鎖ということでいえば、今の教師もそういう先輩たちを見てきて、体育・武道の先生はそういうものだというイメージが残っていたり、あるいは中学校で殴られて育った子が教師になっているかもしれない。

人を叩くというのは、とても後味が悪いことです。そして叩かれた方はみんなが分かってくれるわけではないと思うんです。今会うと「先生に厳しい指導してもらったから今の自分がある」という当時の教え子もいるけど、そうではない子の方が多いのでないかと思う。今でも恨みに思っている子はいると思います。

私は中学校の先生に憧れて先生になった。でもなってみたらそんな教育しかしていなかった。それで高専に移ったという面もある。だから中学校を離れてから20数年間、生徒に手を出したことは一切ありません。

いずれにしても、そういう学校の現場の体罰と、今問題になっているスポーツ現場の暴力的指導とは、分けて考えなくてはいけないと思うんです。

暴力的指導が始まったのは戦後になってから？

――昔からそういうふうに続いてきた暴力的指導を、これからはなくしていかなければならない。

多くの識者は「今はそんな時代ではない」と言います。では時代を遡れば遡るほど暴力的指導が容認されていたかというとそんなことはなく、実はそんなに古いことではないと思われます。

学校での体罰についていえば、江戸時代の寺子屋の様子を書いた絵が、いろい

ろなところに残っていますが、今の学校のように一人の先生がいてそれに子どもたちが向き合っている、という形ではなく、子どもたちはばらばらな方向を向いた机に向かって勉強し、分からなくなったら先生のところに聞きに行く、すると先生が一対一で教えてくれる、というものでした。子どもの年齢もまちまちですから。そういう中には暴力的指導は入りにくいと思うのです。昔の剣道の道場にも同じことがいえます。

それが明治になって学校教育が始まるときに、一人の教師が一斉に指導するという形が始まった。態度や行為の良くない子に対し、見せしめ的に体罰をする。そういうことから体罰が始まっていったと私は思います。

以前からお付き合いのある立命館大学（産業社会学部）の原尻英樹先生などは、体罰が始まったのは戦後だといっています。学校教育の中に軍隊や軍事教練のやり方が持ち込まれたのが体罰であると。学校体育の場面でも、戦後の体育教師は下士官上がりの人たちが中心だったので、軍隊のやり方を持ち込んだのではないかとも言われています。それは確かに一理あると思います。

武道の現場でいえば、原尻先生は大東流合気柔術を習っていて、福岡の大宰府の道場に毎月通っているのですが、一度稽古についていったことがあります。その道場では、弟子が一人来て、先生と組み合って技を教わり、1時間すると帰っていく。すると次の弟子の人がやってきて……という形で常に一対一なんです。あの中に暴力は入らないと思いました。一対多人数という教え方を始めたときに、その中で一番だらしない者とか、みんなと一緒にできない者に対する叱咤激励の意味で暴力的指導が生まれてきた。そういう教習の体系の変化に、暴力的な指導が始まり、根付いたひとつの要因があるような気がします。

日本の伝統的運動文化は勝利至上主義の対極にあった

――現代においてはやはり勝利至上主義が問題であると、木寺先生は授業の中でも触れていますが、戦前の資料を読むと、大正とか昭和初期でも、学校対抗の試合での勝利至上主義はかなり横行していたと感じます。

日本は学校の部活動の中でスポーツが育てられてきましたから、人間形成ということと、純粋にスポーツの技術を高めることの両方を求めました。とても分かりやすいのは野球の例で、最初は学校に入ってきたから、人間形成のためにするのであり試合に勝つことが目的ではないといいながら、学校対抗の試合は絶対負けられないものになったのです。そのために指導者や先輩が叩くのは当たり前だし、一方で試合になったらすごい姑息な手を使って勝とうとするわけです。WBC（野球の世界大会）で日本が2度優勝していますが、審判団からは、あんなことまでして勝ちたいのかと不評だったらしいですね。

勝利至上主義で何が何でも勝たせなければということになったときに、あるレベル、ある年代の子たちには、暴力的指導はたぶんすごく有効な方法だったんでしょう。技術の習得にしても、精神的な面にしても効果があったということは事実です。しかし、それによって強くなる子たちもいるけど、それによって競技を離れていく子たちもたくさんいるわけです。ニュースで報じられているように犠牲者も出ています。

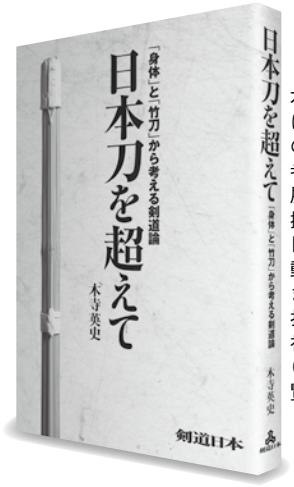
この勝利至上主義というのは明治になってスポーツとともに入ってきたもので、武道にはもともとありませんでした。最近出た本で、江戸の末期に佐賀藩の武士が2年間武者修行に行く本を読みました（『剣術修行の旅日記』永井義男・朝日新聞出版）その本を読むと、武者修行に行った先で一本を取り合う試合をしていません。その代わり一日に100人ぐらいと稽古しているんです。それができるのは、たぶん、運動の形態がぜんぜん違うからだと思いますが、とにかく試合ではなかった。

江戸時代や明治中期ぐらいまでの武道について調べてみると、明らかに「勝敗」とは異なる価値観がありました。それは「技の洗練度」というようなことで、観衆は勝ち負けよりも、その技の素晴らしさに拍手を送っていたわけです。トーナメント戦で優勝を決め、優勝者がもてはやされるという文化はスポーツの最たるものです。

――西洋から輸入したものですよね。日本では京都大会（全日本剣道演武大会）のような形が一般的でした。相撲もそうですね。

日本には伝統的に優勝者を決めるという試合はなかったわけです。内藤高治先生が、昭和天覧試合を（トーナメント形式で）行なうことに反対し、「これで日本の剣道は滅んだ」と言ったのはそういう意味で、剣道には勝負とは違う価値があるということだったと思います。

日本の武道、スポーツはもう一度、「技の洗練度」を評価するような本来の身体運動文化のあり方に戻るべきである、というのが私が今考えているテーマです。それが暴力的指導をなくすことにつながると思っています。



木寺氏の最新刊は、竹刀は日本刀の代用であるという考え方では剣道発展は望めないと指摘し、歴史を踏まえ日本人の伝統的な動作原理を求めたまったく新しい剣道技術論である。小社より好評発売中（詳しくはP95をご覧下さい）